

随想

第173回

「国破山河在」

有名な杜甫の漢詩「春望」の冒頭の一節であり、私も中学生以来、折に触れて好んで口ずさんでまいりました。

あの過酷な大戦が終わって六十年、戦中戦後の悲惨な状況に耐え、これ乗り越えて驚異的な復興を成し遂げ、世界に誇るべき平和で豊かな日本が実現いたしました。

その礎として、国家の安泰と家族の平安を念じ、困難に殉じ散華された英霊の尊い犠牲の上に、今日の繁栄があることを忘れてはなりません。

さて、稲作民族のわれわれ日本人は、古来から森を大切に守って、水稲に不可欠な水を確保してまいりました。

豊葦原瑞穂の国といわれ

る日本の、昔々と続く伝統であります。

山には神が宿るとした習俗が、日本人の精神的な支柱となり、森の恵みに感謝してまいりました。

そして、国破れて山河在り
を合言葉とするがごとく、戦後の復興期に熱心な植林活動が展開され、豊かな緑がよみがえってまいりました。

特に四十年ほど前までは、



森林は財産の象徴として大きな資産価値を持ち、積極的な植林などの林業経営が活発で経済社会の重要な一翼を担ってまいりました。

その結果、森林が保全され、林業経営を一つの基盤として、山間地においても豊かな生活が、一面で保障されておりました。

しかし、経済が高度成長する中で、先進国の工業製品の

輸出が急増し、「貿易摩擦」が国際的な問題となるに従い、発展途上国からは、原材料や農産物、木材などの関税撤廃の要求が強まり、WTO（国際貿易機構）の各種会議を通して、関税障壁の撤廃ないし軽減の圧力が強まりました、木材なども実質上輸入が解禁されることとなり、安価な外国産材木（外材）が大量に輸入されるようになりました。

「国破れて山河在り」

戦後60年に想う

土岐市長

塚本保夫

その反動で、優れた品質である国産材の檜や杉は、割高感が強まり、需要が低迷して、国産材の市況は、深刻な打撃を受けることとなりました。

現実には、日本国内の木材需要の八割は外材に占められており、国産材の占有率は二割にすぎません。

従って、材価は低迷し、事業採算性が悪化するということとで、林業は大変な苦境に遭

遇しているであります。国産材の需要低下と材価の低迷は、山林の手入れなど、森林の健全な管理と保全に大きな問題を投げかけることとなりました。

こうした状況は、森林の資産価値を大きく損なうこととなり、手入れの行き届かない放置森林が増加し、国土保全や環境面で大きな問題を引き起こしております。

ばいことを書いてまいりましたが、日本の国土は森林が適切に管理されてこそ、健全に保持されると思っております。

なぜなら、最近では経済至上主義により、人口の都市集中が進み、人口減少時代を迎える中で、新たな過疎過疎の問題が生ずるのは必ずであると思っております。

最近の国の調査によりますと、全国の自治体の約二割が「今後十年以内に一部の集落が消滅する可能性がある」と回答しております。情報通信基盤が飛躍的に発達し、都会と田舎の情報格差が無くなりつつあるといわれる中で、この心配はどうしたことでありましょうか？

日本の国土保全の基本であります森林の適正な管理のため、改めて国産材の需要拡大と山村の復活を、国民的課題として認識し合いたいものと、戦後六十年の節目に当たり、真に想うところであります。